

- 1 派遣期日 令和元年 7 月 3 1 日（水）
- 2 研修先 学校名（会場名） 筑波大学附属小学校
所在地 東京都文京区大塚 3 丁目 2 9 - 1
<http://www.elementary-s.tsukuba.ac.jp/>

3 研修内容

（1）視察校における研究への取り組み

研究のテーマ：全員の「主体的・対話的で深い学び」を支える国語授業力

日本授業 UD 学会国語部会では本テーマを受けて、国語科における全ての児童の「主体的で対話的な学び」を支えるために、授業 UD の視点に立って国語科授業づくりに取り組んでいる。授業 UD とは、発達障害のある児童も含めて、全ての児童が楽しく学び合い、分かることを目指す、通常学級における授業づくりのことを指す。教師側が黒板の周りをきれいにし、学習の見通しをもたせることよりも、児童側が「楽しく学び合える」「もっと授業をやりたい」「授業がもう終わり？」と感じられることに重点を置いている。

（2）授業公開①（6 学年 国語「笑うから楽しい」 三浦剛先生）

①導入の工夫

「楽しいと感じるから笑う」経験と「笑うから楽しいと感じる」経験のどちらが多いかを想起する活動を通して、問題意識を醸成していた。導入に長く時間をとっていたが、児童が自分事として説明文を捉えることができるようにする上で、重要な活動であった。

②展開

教師が児童に提示した文章は、事例が 1 段落分、意図的に抜かれているものであった。後から提示した 1 段落分の事例がどの部分に入るか、またその事例が本文に本当に必要な文か考えさせることで、児童にゆさぶりをかけていた。

（3）公開授業②（2 学年 国語「おおきくなあれ」 木村洋介先生）

①which 型の文の提示

本授業は詩の解釈を課題としていた。解釈を助けるために、導入では本文を隠し、隠した部分に入る言葉を which 型で提示していた。児童はそれぞれ積極的に理由を述べながら、隠した部分に入る言葉について発表していた。説得力のある理由が発表されると、途中で自分の考えを変える児童の姿も見られた。低学年の段階からきちんと、理由を付けて説明することや、相手の話を最後まで聞くこと、相手の話を聞いて自分の考えを変えてよいことが定着しており、全児童が安心して交流できる雰囲気があった。

②動作化

隠した部分に入る言葉は「ぶるんぶるんちゅるん」であった。「ぶるんぶるんちゅるん」を動作化することで、児童が意欲的に詩のイメージを交流できるようにしていた。また、教師が数名を代表で発表させ、「○○君は、どんな考えでこの動きにしたと思う？」と問うことで、言葉の解釈の多様性に触れさせていた。

③ゆさぶり

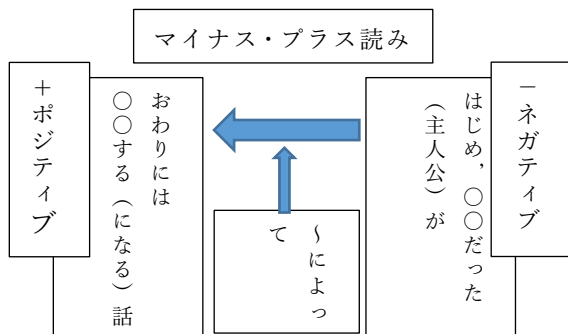
児童全体が詩のイメージを共有できたところで、教師が「ぶるんぶるんちゅるん」という擬態語が、この詩に必要なのかについて発問をした。児童全体に詩のイメージの共有化が図れていたことで、積極的な意見交換が行われていた。ゆさぶりの発問を通して、擬態語があ

ることで、動きや様子、作者の気持ちがより伝わるということが実感できているようだった。

(4) 授業提案（笠原三義先生、小野絵美先生）

① センテンスカードの活用

授業の導入で、順番がばらばらになっているカードを提示する。カードの内容は、物語の中で重要な語句や場面のものを取り出す。文の順序を変えることで物語のストーリーを思い出しやすくさせる効果がある。また、センテンスカードの内容に誤りがあるものを含ませることで、クイズのように楽しく授業に向かえるものになる。ただし、正誤だけを確認するのでは、単なるクイズなので、授業のねらいを焦点化して、それに合わせて表現を置き換えることが大切である。また、教師が間違いの理由や表現の比較について問い返しをすることで、中心人物の気持ちの変化等を確認していくことも大切である。



② マイナス・プラス読み

マイナス・プラス読みは、中心人物の図をもとにして、「はじめ」と「おわり」の対比的な関係をとらえる読み方。

中間部分の「きっかけ」の前後の、中心人物の変化をとらえやすくなる利点がある。

(5) 講演（筑波大付属小学校 桂 聖先生）

- ・「主体的で対話的な深い学び」を支える授業にするためには、教材にしかけをつくることが重要である。心情の読み取らせ方等の論理を授業の目標にした上で、授業のねらいを焦点化しなくてはならない。また、児童が教材提示によって自然に考えて話すようになるには、教材の視覚化を工夫することが大切である。さらに、児童の考えを整理して、全員が理解できるように共有化が必要である。
- ・全員が授業に参加できる取り組みをこまめに、継続的に行っていくことが重要である。取り組みの例としては、擬態語、擬音語（オノマトペ）、色彩語、情景描写、心内描写等にはどのようなものがあるのかを考える活動が挙げられる。また、ペアや全体で考えを共有する場面では、相手と同じ量を話すことを意識させたり、相手の言った意味はどういう意味だったかを説明させたりすることが重要である。

・ which 型課題

What 型等の課題提示は児童にとって難しいことが多い。そのため、Which 型の課題提示で、授業で児童自身が選び

「きめる」場を設けると、課題に向かって自ら進んでいこうとする主体性がもちやすい。「きめる」際には必ずどうしてそう思ったのか理由を示すだけでなく、ペアや全体で共有することで、多様な解釈があることに気付くことができるようにすることが大切である。

【Which 型課題の授業の流れの例】

- ①問題意識を持たせる
- ②Which 型課題の提示（拡散）
- ③課題に対するゆさぶり（収束）
- ④まとめ・振り返り

4 感想

- ・「主体的・対話的で深い学び」のある授業は、児童一人一人の「きめる」「自分のこととして考える」「話す」「考えを聞く」活動が保障されていると感じた。自分の考えや意見が生かされる場所があるからこそ、児童の主体性が生まれるのだと痛感した。自身の授業を振り返ると、一部の児童とのやり取りになってしまっていたことがあった。研修で学んだことを生かし、今後は児童一人一人に目を向けたねらいの設定、教材作り、交流の設定等を行っていききたい。